

定本
戦争文学論
安田武

定本
戦争文学論

定本戦争文学論

安田 武（やすだ・たけし）

一九二二年東京に生まれる

一九四三年上智大学予科在学中に学徒出陣

復員後、編集者生活を経て評論活動に入る

主著

『戦争体験』 未来社

『学徒出陣』 三省堂

『人間の再建』 筑摩書房

『芸と美の伝承』 毎日新聞社

『型の文化再興』 筑摩書房

一九七七年八月三十日初版発行

著者◎安田 武

発行者栗生一郎

発行所株式会社第三文明社

東京都千代田区猿樂町二一五―四

電話東京（二九四）八七三一（代）

振替東京五一一一七八二三

印刷所図書印刷株式会社

製本所株式会社星共社

1091-3061-4438

目次

誠実主義と転向——山本有三論——	5
大政翼賛会文化部長のイス——岸田國士論——	53
戦争文学の周辺(一)——火野葦平論——	137
戦争文学の周辺(二)——尾崎士郎論——	193
戦争体験と文学——武田泰淳論——	241
戦争文学にみる「民族の気質」……	271
組織されない好奇心——廣津和郎論——	289
あとがき	

装帧
菊池 薫

定本 戦争文学論

誠実主義と転向——山本有三論——

一

近時しきりに、文壇のための文学にあらず、国民のための文学を求める声を聞くとき、……終始時代の道義に心をとどめ、……円熟せる思慮と鋭敏なる社会的関心とを以って、その豊かなる人間的愛情をはぐくみつつ、教養の文学、意志の文学を樹立して、自家の風を大成したるもの著者であります。

これは昭和十四年（一九三九年）秋、岩波書店が山本有三全集を刊行したときの発刊の辞である。むろん、一出版書肆の宣伝・広告文に過ぎない、ともいえる。しかしながら、これを単に宣伝の「謳い文句」として看過することはできないだろう。吉田甲子太郎は書いている。

有三の小説は、一言にしていえば、文壇のために書かれた小説ではなくて、社会のために書か

れた小説であろう。文学青年のために書かれた小説ではなくて、おとなのために書かれた小説だといふことができる。⁽¹⁾

「国民」のための（あるいは「おとな」のための）文学、時代の「道義」、鋭敏なる「社会的関心」、豊かなる「人間的愛情」、「教養」の（あるいは「意志」の）文学——これらはおそらく、山本有三が愛読する読者が、この作家にたいするイメージを組み立てようとするとき、必ず泛んでくる一連の言葉であるにちがいない。宮本百合子もいつていっているとおり、「山本有三氏の読者たち、山本氏の作品から何かを期待している人々は……もつとずつと謂わば野暮くさいものをもって作者に向っていると思う。何か人生的な、何か社会的、指針的な、何か誠実に生きてゆく人間の姿の表現を、読者は山本有三氏に求めている。山本有三氏と読者との結びつきは、どこかただ面白い小説という以上のもの、に対する暗黙の契約の上に立っている」⁽²⁾（傍点安田）ものなのだ。

昭和の初頭から戦後の今日に至るまで、この作家ほど、広汎な層に読者をもった人は少ないのであるまいか。⁽³⁾ その意味では、まさしく国民（的規模の）文学であった。山本をこのように支持した読者が、時代の道義に心をとどめ、教養の文学、意志の文学を樹立した理想主義の作家、人間主義の作家として、この作家を仰ぎ見ていることは、ほぼ疑う余地があるまい。ところが、このように広汎な読者の支持を受けている山本有三の文学について、これを論じた研究論文、評論の数は意外に少ない。山本の文学は、それこそ国民文学という呼称が、一見当然であるかのごとき読者層を

一方にもちながら、他方では、それと逆比例するかのよう(1)に、近代文学史(あるいは文壇)からは黙殺されつづけて、ほとんど真正面からの研究、批判を受けていない(2)。

「しかし一面では、文壇がケブタがり、カゲグチを利き、ツマハジキをするような指導者の風格、ネチネチした文体、コッテリした美的小説は——」と、伊藤整は書いている。「一般読者のうちの、マジメで良質な読者の氣に入るものであって、確実な愛読者を多く持つのは、そういう型の作家が多いのである(3)。」

ところで、伊藤整のいう「一般読者のうちの、マジメで良質な読者」にとって、文学作品というのは、ひとつの芸術品として鑑賞されるより以前に、「思想」——あるいは「人生」を教えるものとして読まれているのではあるまいか。多くの人たちが、自らの成長期をふりかえって、文学青年(少年、少女)であった時期を、ほとんど例外なく経験しているはずであるし、夏目漱石や島崎藤村、芥川龍之介等は、むかしも今も、若い青年男女の読者を失わない。私たちは、自分たちの人間形成を顧みて、「文学」こそ、自分たちが最初に当面した「思想」であった、ということ(4)を認めざるを得まい。文学作品を通じて、はじめて思想を思想としてうけ止め、考えること(思索の方法)を学ぶというのが、私たち日本人の精神形成の特質なのではないか(5)。(このことは、多分、日本に宗教がないということと関連するのだろう。思想としての宗教が、私たちの生い立ちには欠けているのだ。)文学作品が、芸術として味わわれ、鑑賞され、批判される以前に、「マジメで良質な読者」にとっては、それは何よりも思想であり、人生論であるとすれば、宮本百合子が山本文学の秘密として指摘した

あの「暗黙の契約」とは、日本の読者全体が（ひとり山本の文学にたいしてのみでなく）あらゆる文学作品一般にたいして、一様に求めている「暗黙の」要求なのであり、山本文学は、このような読者の要求に満遍なく応えることによって、多くの支持層を得ることができたということがいえる。

「転向」研究の一環として山本有三の文学を扱う場合、おそらく、「どこかただ面白い小説という以上のもの」を文学に求めている「マジメで良質な読者」の「暗黙の」要求と、山本文学との結びつきという視点は、欠くことのできない重要性をもっていると思われる。いや、むしろ、この視点から切り取ることによってだけ、山本有三の転向という主題は、正しく位置づけられるのではないか。『転向』（思想の科学研究会編）上巻で、鶴見俊輔が示した転向型に従って山本を分類すれば、それは、なしくずし型であり、鈍角型長年月型であって、しかもむろん無自覚型である。彼の一本気な頑固さに支えられた「誠実主義」は、それなりに一貫していて、そのかぎりでは、むしろ今日までの生涯をつらぬき通しているといつてよい。おそらく、明白な転向時点を山本有三に求めることなど不可能に近いであろう。にもかかわらず、その山本の文学に「マジメで良質な読者」が結びつくとき、「マジメで良質な読者」が、ころりといかれるとき、それは歴史の脈絡のなかで、大きなある意味では最も悪質な、といわねばならぬような「転向」が行われたのだと私は思う。だから、それはただ「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」（鶴見）として定義づけることに困難があるし、権力を他の社会的圧力と置き換えてみても、なお不充分であるような——誤解をおそれずにいえば、その存在自体のうちに転向がある、精神構造そのもののなかに転向を含む、とても

いい切るより仕方のないもの「最も悪質な」というのはその意味であるような「転向」があるのであり、それは、私たちのいわば「気質」とともにある。

本多秋五のすぐれた指摘に拠って分類すれば、註釈するまでもなく「一般に進歩的合理主義的思想」からの「天皇制への帰順」「東洋的自然主義への溶解」^(?)として取り扱われるべきものでありながら、そのプロセスは、従来、普通にいわれてきたような意味で「転向」と断定することが不可能であるような、しかし、それだけにこの場合の自己偽瞞——従って他者への偽瞞の微妙な奸計は、それが自他ともに無自覚であるだけに、私があえて「悪質」と呼ぶような過程をたどっている。が、翻って考えれば、山本の「転向」のこのような型こそが、翼賛会時代、国策に協力した自由主義出身者のかなりに共通していたものであって、この「自由主義者」と「マジメで、良質な」国民との合作に、翼賛会成立前後の時期を象徴する「転向」の問題点があるのだと私は思う。私が、山本文学に執着する最大の理由はそこだ。⁽⁸⁾

二

先に引用した宮本百合子の評論は、山本の諸作品のなかから、特に『女の一生』（昭和七・八年）に沢山の筆をさいいて、これを『波』『風』等比べて、遙かに意欲的な作品とし、「少くとも同じ作者によって書かれた従前の諸作のうちでは、この作者の主要テーマ、何をなすべきかが積

極的に答えられている点で傑出したもの」と書いている。

昭和十二年になって書かれたこの論文で、宮本が、殊更に『女の一生』を選び、熱っぽく論じているのは、それはただ女流作家としての関心からということだけにとどまらず、そこで、およそ何を言いたかったのであるか、彼女の心事は推測するに難くないことだ。だから、宮本は、その後で、「屈辱に堪へて私生子を生まうとした允子の心は、子に対した場合は実に俗人的」ときめつけ、「允子の棲んである世間並のいいこと、わるいことの評価と、允男の行動に対する歴史的な意味についての無理解」（傍点安田）という点に、この作者の限界と、この作品の致命的な破綻とを見ている。

「第二の出産」で新生の道を切り拓いていった允子が、「息子との間は、生活的本質で断たれっばなしで、そこはそれなりで、しゃっきり腰をひき立てた」ことをあきたらず思う。「そこはそれなり」のまま、この作品が、やはり山本一流の「何をなすべきか」という積極的なテーマに、「しゃっきり」とつらぬかれ、「それなりの」進歩性や道徳性に裏うちされていることが我慢ならぬらしいのだ。

しかし、この「健気」で、「意志」的で、世の母親並でいえば「進歩的」でさえあるかのようなひとりの女が、「実に俗人的」なのは、ただ、息子にたいする場合のみでなかったはずである。彼女の若き日の恋人昌二郎にたいしても、夫の公荘にたいしても、父親にたいしても、兄にたいしても、允子の対人関係における感情の動きは、意外なほどに単純で「俗人的」ではなかったのか。

昌二郎がまだ大学在学中で、外交官試験をねらって勉強していると聞いたとき、允子が示す「む

しろ崇敬に近い」感情、彼が試験で苦しめられているとき、自分もまた有賀長雄の『近時外交史』を、「およそ彼女には興味のない書物」にもかかわらず、「辛抱して」読んでいる允子の姿——これを「俗人的」ということは、ひとまずやめよう。しかし、公莊との恋愛のさい中に、父危篤の電報を受取った允子が、「このごろの自分のおこないをかえりみて、非常に父にすまなく思った」り、精養軒の藤棚の下で、「結婚という形式」について懷疑的に語った允子が、公莊から結婚を拒絶されるや、「名譽もあり、地位もある方だから、決して、こんなひどいことをなさる方とは、思っていないませんでした」と絶叫したり、その公莊との経緯を兄に告白して、激怒した兄から「ふしだらな女」と罵られ、「兄からびたびたといわれると、彼女は今さらのように、自分の罪がほね身にこたえた」りする允子のそうした気持の動き方は、およそ「俗人的」ではないか。何より、公莊が、病床にある「フラウとシュヴェスターのようにつき合ってもらいたい……」というとき、「公莊の態度がまじめなので、いつのまにか次第に心がほぐれて行つた」(傍点すべて安田)という允子には、荒正人も指摘しているように、近代女性らしい自覚のなにもものもない。

「そこはそれなりに、しゃっきり腰をひき立てた」のは、決して息子にたいする允子の姿なのではなくて、おそらく、この作品に臨んだ作者の制作態度そのものなのだ。そこに登場する作中人物の本質的な俗人性は「それなり」のまま、「何か人生的な、何か社会の指針的な、何か誠実な」姿に「しゃっきり」と立ち直る作品の構成に、宮本もいつている「狡く身を躲し」た作者の姿勢が見られる。

『真実一路』（昭和十一年）について、宮本は、『真実一路』に至って、この作者の核心を画すテーマの曲線は充実した力を失っている」と一蹴したきり、もはやこの作品について語ろうとする意欲をもたなかったが、『女の一生』を書いてからわずか一年半の後に発表された『真実一路』で、『核心を画すテーマの曲線の充実した力』を失わねばならなかった山本文学の「核心」とは何であったのだろうか。

三

山本有三、本名勇造は明治二十年（一八八七年）栃木市に生まれた。父は元宇都宮藩士で呉服商を営んでいた。

十一歳、小学校を卒業してから漢学塾に通い、『四書』、『文章軌範』などの素読を学んだ。

十五歳、高等小学校を卒業すると、上京して呉服商の丁稚になる。一年ほどで逃げ出し、郷里に帰って、学問をしたいと申し出るが、「学校などやると、なま意気になる」といって許してもらえず、やむなく家業を手伝う。

十八歳、母親のとりなしで、ふたたび上京、神田の正則英語学校に入り、翌年、中学の補欠試験を受けて五年に編入される。

二十歳、第六高等学校の入学試験を受けて合格したが、その秋父親が死亡したため、退学して郷

里に帰る。二十一歳、第一高等学校を受験して落第。二十二歳、三度高校試験を受けて、一高文科に入学。一年落第して、芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、松岡譲等と同級になる。

二十五歳、東大独逸文科選科に入学。二十七歳、高等学校の検定試験を受けて、大学の本科生となる。学資欠乏して、郷里の先輩から借金したり、原稿書きのアルバイトなどする。

二十八歳、大学卒業。井上正夫一座、喜多村緑郎一座などで幕内生活。――

以上が、作家以前における山本の経歴のあらましである。⁽¹⁾その後、三十歳で早稲田大学の講師となり、三十一歳の時に戯曲『津村教授』を書いている。三十二歳結婚。彼の作家生活は、この頃から本格的に開始されたわけである。

この簡単な「年譜」を追っていても、そこには、負けず嫌いで、ガンバリやの一少年が、青年期を通じて、苦境にうち克ってゆく努力的な生い立ちの跡が、はっきりとわかる。『路傍の石』の吾一は、作者の少年時代そのままであるか。おそらくそのままだではないだろう。しかし、この作品がかなり自伝的要素を含んでいることは、「年譜」と対照してわかるし、また作品そのものからもわかる。吾一は、「親切なら、うれしいが、見さげられているのだと、あわれまれているのだと、我慢ができない」ような少年である。「彼のちいさいからだの中には、ことごとに、はね返してやろう、はね返してやろう、とする精神が常に燃えていた。」友達からヤユされた口惜しまぎれに、鉄橋の枕木にぶら下ったりするのだ。

「見さげられ」たくない、「あわれまれ」たくないといういちずな反抗心をテコにして、山本は、

親の意志に逆らい、何度も何度も検定試験や入学試験を受け直し、変則的なコースを無理してたどりながら、遂に最高学府卒業まで漕ぎつけてゆく。一高―東大という秀才出世コースを、異常な努力によってぐり抜けてゆくのだ。芥川龍之介、久米正雄、豊島與志雄、菊池寛等と、第三次「新思潮」をおこしたのは、大正三年（一九一四年）、彼が二十七歳の時のことであるが、順調なコースをたどってきた芥川、久米、豊島等と、山本の生涯のコースは、ここまでですでに決定的に異なっている。その上、年齢的にも、菊池が一つ、豊島が三つ、久米が四つ、芥川が五つ年下であって、しかも、若い方の芥川、久米、豊島らは、その後間もなく、ジャーナリズムで、華々しく活躍しはじめた。彼らが、新進作家として華やかに脚光を浴びているなかで、山本は、発表するあてもない戯曲（『嬰兒殺し』、『津村教授』等）⁽¹²⁾を書いていた。

おちぶれた旧士族の家に生まれ、変則的な学歴をたどり、文壇への出発が遅れたという点で、山本と菊池の場合がよく似ている。山本は、いつもよい条件に恵まれ、スラスラと生涯のコースを歩んでゆく仲間を横眼で睨みながら、誠実な実直な努力を重ねていわば臥薪嘗胆した。そういう時期をかなり長くもった。負けず嫌いで一徹な性格が、この努力を支えたのだ。「……歩き方は遅いかもしれない。足どりはたどたどしいだろう。しかし、進むべき道だけは取りちがえてはいないいつもりである」といい、「ふくらはぎの太い重たい」⁽¹³⁾ 歩行者に自らを譬えている言葉には、三十九歳になった山本の自覚と同時に、自負の想いが秘められている。彼は秀才肌の才人ではなかったが、常に努力型の優等生であった。